



温泉のお湯を頂く

北浦家族旅行④

年齢とともに旅の楽しさが減る。うな気がする。しみが変わってきた。観光目的の旅も、修学旅行から海外旅行まで、社会全体が高齢化でいろいろある。一昔し、旅行者の旅の前は庶民の海外旅行なランも変わってきたよ。どは夢であったのにそ

れが当たり前前の有り難い世の中。若いころの海外旅行は観光地を駆け足で走り回るものだった。ホテルに到着するのは夜八時ごろ。翌朝八時にはホテルを出発ということも多く、旅の宿は寝るためのものであった。

しかし最近の海外ツアーは以前よりゆったりとした日程になっている。それでも海外旅行に「温泉宿」は無縁である。

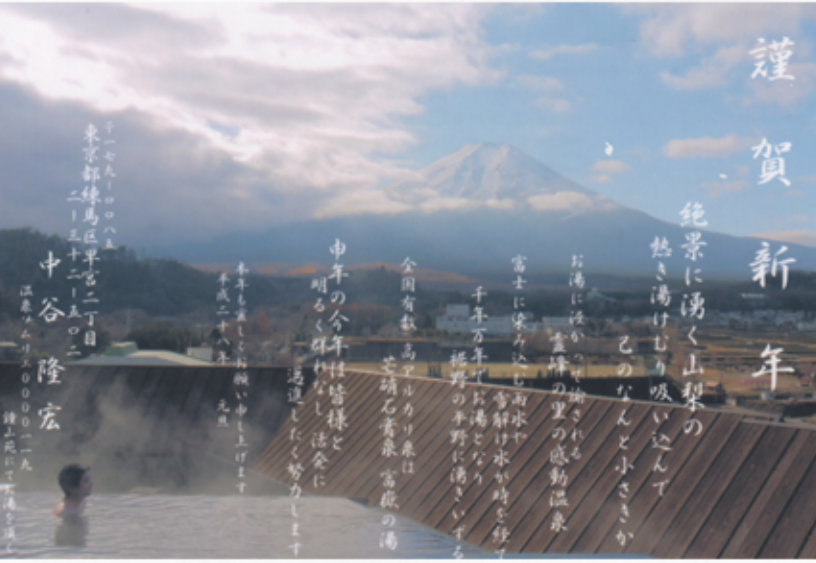


ホテルでもらった絵葉書 = 『升本猛メルヘンの詩〜油谷の夕焼け』

国内旅行ではこの「温泉宿」が大きなウエイトを占める。それほど日本人は温泉好きである。今までは海外の旅が中心だったが、最近では国内の旅に関心が向くのも温泉と関係がある。

今旅した北浦地方は温泉宿が多い。長門市は湯本温泉、湯面温泉、俵山温泉、黄波戸温泉、油谷湾温泉を「五名湯の郷」としてPRに力を入れている。意外に温泉が多いのが隣の下関市。豊北町旧跡を中心が下関市になったのも一因だが、今まで知っていた川棚温泉と一の保温泉のほかに滝部温泉や吉見温泉など十以上もある。

謹賀新年



左下が湯に浸かる中谷アナ

「油谷湾温泉の湯が良」といって、特にお湯に泊まり、朝風呂に泊まる。娘たちが住む山口市の湯田温泉、この宿の湯も同じと、思っていたら宿によって違うらしい。

温泉といえば、今は山口放送を退社して東京で活躍している中谷アナウンサーを思い出す。彼からの年賀状は毎年違った温泉に浸かるもので、今年も山梨県の温泉宿。「温泉ソムリエ」だそうで、賀状の最後に「鐘山苑にお湯を頂く」とある。私はたかが温泉と

思っていたが、確かに温泉は大自然の恵みだ。「お湯を頂く」という言葉、謙虚な表現に限りなく引きつけられる。若いころの名所は置いていけません」とある。

人間は感情の動物、性のお湯を頂く。ちよつとしたことで良い気がする。朝飯後、のんびりした温泉は大自然の恵みだ。「お湯を頂く」という言葉、謙虚な表現に限りなく引きつけられる。若いころの名所は置いていけません」とある。